われらもしひとしき二人ならば
異なる二つのかたちを要せじ。
われらもしひとしき一つのものならば
かゝる黄昏の國にありて
われら自らの名を呼ふべし、
われらいかなればかく相抱くならむ。

君、わが名を呼ぶ
君わが名を呼ぶ。

われらかたみに

日は暮れゆく
山には黒き雲かゝる
風冷たし
緣に出で
接吻(せつぷん)をせむ。

われらが魂のたそがれに
灯を點ぜよ、
われらが行手を輝かせよ、
われらかくも遠く市を離れ
われらかくも悲しく接吻をせむ。

在るはたゞわれらふたり
語らずともわれらは知る
日は暮れたり
星輝きいづ
われらかたみに接吻を交さむ。

くちつくるは

この君を
いだけるは
夢のわれ、
まことは暗き
陰影のなか、

ほと息づきて
畏怖(おび)ゆるなれ。

いだけるは
神の翼、
くちつくるは
おそらくはかの

花のこゝろ、
われはただ
陰影にゐて
うちふるひ、うちわなゝく。

出現

さてそこに光が幽かに輝き始めた、
そは私を包み、
また私の心に棲んでそれを捕へた。
曉のかはたれどきの思ひから

また夕暮の薄明（ツワイライト）の軒下より
光は幽かにもわたしに見え出した。
一個の女性の出現だつたのだ、
神の尊嚴と、
溫室（むろ）咲きのオフコニヤの花の姿と
雲のごとき憂愁の面紗の所有者。

メリサンドの心を知り
默して夕暮のとぼそに立ちつくす
この君の憂ひは天に通ふ。
長き裳のかげに息づき、
慈愛に限りなきおろかさを以て
奴隷のごときわたし自身を見出した時……

けれど彼女はそこにあつた、
微笑と愛撫がわたしを迎へた、
そはかの夕暮のツワイライトから
またあかつきのかの軒より。

圓光

大いなる輝き、
圓光に似たるを
われ君の後に見ぬ。
狹き陋巷より
裝ひして君の立ち出づる時、

大いなる輝き、
圓光に似たるを
われ君のあとに見ぬ。

さくら草

相默す
二人が間、
さくら草
ほのに咲きたり。

あかあかと
爐には燃ゆる火、
靜かなる
雪のあした。

はじめて見しとき

明るきうれひを含みて
雪に立つ
白き水仙、
われはじめて君を見しとき
それに似ると

君を思ひき。

永日

泣けばとて、なにをなげくぞ、
うらむとて、なにをうらまむ、
うららうらと、樹には日の照り
大ぞらを、けむりながるる、
はしらによれど、あぎきなや

ひとのこゝろわれにかへらず。

思ひ

あかつきが硝子戸を透して忍び入るやうに
いつとしもなくわたしの心に歩みよつた悲しい憂愁
よ、
君が思ひよ。

わが戀びとは

わが戀びとは
水の精、
水よりうまれ
來し人ぞ。

わが戀びとは
夢の精、

ゆめの中なる
花に似る。

わが戀びとは
ひとすじの
勿忘草(わすれなぐさ)の
そらのいろ。

何處の家の時計ぞ

何處の家の時計ぞ
人をおもひて心たえがたきとき、
水ににじむインクのごとく
夜更けし空氣ににじみて
その音は鳴り出づ。

霜

小さき郊外の停車場に向ふ小徑、
そこに霜は白く殘り
松並木は寒げにたちならびたり。
廣告板に朝日は矢のごとく、

されど冷やかげなり、
若き驛員は井戸の水を汲む、
また窓より顏を出して
物憂げに空を見上ぐるもあり、そは年老いたり。

空は次第に雲のかたちを現し來り、
午後の快晴を示す。

霜置きし小徑には
足跡もなし、
たゞ小さき犬のさまよひ行きしあとのみ見えたり。

地響きし、地響きし、
遠きより電車來れり、
郊外の小さき停車場、

朝にして、未だ七時半なり。

朝

朝は晴れ
日光は春のごとく輝けり、
自炊生活の朝のたのしさ、
すでに飯も終り、机の前に新しき新聞紙を展きつつ、
この朝たづね來るべき人を待ち詫ぶ

小さき停車場に着く電車の扉より
その人は出づるならむ
プラットホームのスロープを下り
改札口を横切り、
若き驛員に後姿を見送られつつ
松の並木つづく一すじの小徑を
彼女は此方へ歩み來る。

朝は晴れ、
日光は春のごとく輝けり、
自炊生活の朝のたのしさ
すでに飯も終り、机の前に新しき新聞紙を展きつつ、
この朝たづね來るべき人を待ち詫ぶ。

青き笠

電燈に
青き笠をつけたり、
そこにわが世は青く展かれ、
わが追想は木の葉のごとく、
春に逢ひし

そは葉の呼吸のごとし。

そがなかを
君こそは歩むなれ、
裳をかゝげし手の青さ、
また、ほゝえめる
海のごときくちびる

しづしづと
君こそは歩むなれ。

おほぞらの晴れし日に
君こそは
歩むなれ、

追想の青き山野を
かへり來ぬ
むかしの夢に。

あはれわれ電燈に
青き笠をつけたり。

時計

時計のみ、刻をきざみて、わが靜かなる夜の思ひを傷つくるごとく思はれたれば、とりて蒲團の下に敷きつ。されどそこにしてなほ哀れにも打忍び囁くをきけば、こころ哀れになりてなかなかに打ち捨て置きがたく、またとりいで丶冷たき金具を頰に當てつ。

まことに時計の刻をきざむは生れ出でし日とともに與へられたるならはしなれば。われ戀をする、うち忍び、ひとり小さく思ひつづけてあらむ、その日もやがて來るべし。

夜の思ひ

井戸の蓋に凍りて
眞夜中、底知れぬ深みに落ちゆく滴り、
沈默の層。

物すべて靜寂と死のなかにひそみ

われもまた默して物思ふなり
眞夜中……。

わが傍らに暖き臥床あり
またさかんなる火あり

心しづかにさしぐめば

何を憂ふるわれぞ、
いだけども、くちづくれども、

とらへかねし人のこころに
水いろの花の惱みに
あけくれて、嘆くわが戀。

物すべて靜寂と死のなかにひそみ
われもまた默して物思ふなり
眞夜中、人の去りしあと。

わが窓は閉されてほの暗し

ときたまに
日は訪ひくれど
わが窓は閉されてほの暗し。

そがもとに盲目の少女泣き濡れ、

曇りたるマルヴルの像のごとく
聲もなくうなだれたり。

ひらかれざるわが部屋は、
ひねもすの冬の夕暮、
屋根の上にあられたばしる。

かなしみつつも戸をいでず、
われはおもふ遠き地平を、
去りゆく人のかげを。

刺

われ常にこころの傍らに、
その一隅に、
小さく鋭き傷を見出づ、
そはわが爲めの糧にして
生命の源なり。

われ樂しめるとき、その傷はいたみ出で、
たのしみを鋭くも輝かせつ、
われかしなめる時、その傷はうづき出でて
いよよ心を刺すこと深し。

自ら求めて得し傷なれど、

われはそをいやさんとは思はで
永久に心のすみにひそまむことを願ふなり

柔き肉に喰ひ入りし、
そは刺のごとくに。

蜜蜂

晴れし朝、
わがこころなる巣箱をたちいづる蜜蜂のむれ、
すこやかに、いさましく、彼等は樹々の間を、
山を野を遠ざかり行く、
晴れし日の悦楽の太陽を浴びつつ、

われうつくしき女王蜂とともに佇みて、
遠く彼等をのぞみ、彼等に慈愛の瞳をおくるとき、
わが世のたのしさよ、
われ女妃とともに手をとり交し
けふもまた、
晴れわたる空を仰ぎぬ。

人魚の歌

風も吹かぬ夜の深さ、
その溪底に歩み入る旅人ありけり、
ながき旅に勞れたれば、
歩みもたどたどし。

おぼろに月も出で、
白銀のごとく水も流れたり、
旅人の姿に
おどろきて、身を隱す
蛇もありけり。
旅人は憂深ければ、

また盲ひければ、
樹立のなかなる遠き星を見ざりき。

あゝいま海岸近く、
帆を下すいとしのびやかなる船あり、
黒き衣もて包まれし。

そはあまたの旅人をのせたり、
無言のまま人々は顔を見合せたり、
波には眠る人魚の夢。

旅人は溪底を出で來し、
あはれ彼は盲ひたれば、
船を見ず——海を見ず。

船はまた出で行けり、
旅人の海ぎしにいでしとき
船はなかりき。

風も吹かぬ夜の深さ、
されど何處やらん曉の人聲す、

旅人はむなしくも立てるなりき、
波には醒むる人魚の唄。

巡　禮

巡禮は立ちいづる——
みどりの樹影の夢より覺め、
また固く
草鞋を結びて。

空はいま
青くはれたり、
ゆくてには
夏のみづうみ、しづかなる
波のおもてに、
灰色の
鳥も浮くらむ、

日はななめ。——

巡禮は
空を仰ぎぬ。

人魚の嘆き

岸にあらはれて
人を驚かそうか、
珊瑚の礁に
身を沈めやうか、
船を迷はせて

くつがへすもよいが、
いつぞ波の上の日光に
曝されて死なうか、
海に生れた身の因果
光る鱗のうらめしさ。

見送人

——ある人の死に

夕暮は忍び寄り、
眠れるものに忍び寄り、
その傍らにたたずむ……

風景畫のおもてに暮れかかり、
窓かけに身をひそませ、
頽折れし寢臺の脚にそは動かず。

——彼は善人なりし、
曾て人を殺さず、
また賭事を好まざりき。

見送人はみな
薄きいちやうの衣をつけ、
夕暮のなかに凝視せり、
かれらは失はるることなし。
靜かに阜頭を離るる船、

離るる船、
見送人の群は立ち盡す、
——僧侶のごとく。

夕暮は忍び寄り、
眠れるものに忍び寄り
その傍らにたたずむ。

夕暮

夕暮、
寺を出る、
風冷たい
山門、
いつせいに

靡く麥の穗。

背に縛る
桑の葉、
老翁は
腰かがめ
過ぎて行く。

さし迫る
夕闇、
遠き田に
牛追ふ農夫、
あらがふ
黑き影。

肉體の秋

窓のほとり

すべてのもの生命(いのち)を持ち
すべてのものそのかぎりを歌へり
われはたのし
晴れたる日のわが窓のほとり。

肉體の秋

神經はつかれ、
思索は何か夢を見る、
むなしく腕を垂れて
たゞそこに肉體の秋はあり。

野に出でゝ

野に出でて
歌はまし
曉の
野に出でて
歌はまし、

めざめたる草の花とともに、
曉を知る
水の流れとともに、
あはれ
輝きいづる太陽をことほぐために
野に出でて
歌はまし。

落葉

月の前に落葉する
そのごとく
こころの空に落葉する、
明るきなかに落葉する、
寂しや。

威壓

椅子を距てし
彼女の黑き瞳の大いなるまたたきのかげに
經驗なき
若き命は佗首(うなだ)れたり
重く、悲しく……。

畫のらんぷ

みすぼらしい畫のらんぷ、
お前を見ると
「夜」のあさましい亡骸(なきがら)を思ひ出す。
道化(おど)けた曇り顏と

塵埃だらけの油壺、
みすぼらしい畳のらんぷを見ると
「夜」のあさましい亡骸を思ひ出す。

生存

私は生きてゐる、
私の涙は
たゞ私が生きてゐると言ふ力強さの爲めに流れるの
だ、
空は晴れ、

戀人は私を待つてゐる、
あゝ私の生存、
私の涙はたゞ私の生きてゐると言ふ幸福のために流
れるのだ。

雨の樂音

ひとりじつと座つてゐると
外は絶え間もない雨の樂の音、
秩序をみださずに降る空の涙、
私のこころは次第に深い方へ、
樂しい故郷へ、やすらかな

私を待つものの住む國へ……。
雨は絶え間のない空の音樂、
はてるときない流離の涙、
雨はこころに
降りしきる。

心のそらの暴風雨

みだるるまゝに手もつけず
荒ぶがままにまかもたる、
こころの暴風雨、
そがなかにゐてちゝと啼く
小鳥の姿ぞあはれなる。

鞦韆

はつ秋の夜の
息ひそめたる樹の間に
鞦韆を揺るこころよさ
月さへうすく輝けば。

秋の夜

蟲の音、細くさびしく
そを聞けば
かなしかり、
ひとり寐て秋の夜半をさめぬれば。

心より心へ

月色の水が流れる。
こゝろよりこころへ
機關(からくり)の音も靜かに
こころよりこころへ。

蕎麥打つ唄

蕎麥打つ男の唄きけば
異國の秋の夕ぐれの
旅びとのこころを思ひ出す。

家も故郷も何もなき

若き旅人を
おもひ出す。

祭の夜

祭の夜はふけぬれど、
なほ街路は雑沓せり。
露臺の草の葉には露下り、
はてしなき濃青の空のもと、
そふはによる君の髪は匂へり、

われあたゝかき唇をそがなかに埋むるとき
雑沓はまたひとしきりどよめき立ち
はるかなる川に花火あがれり。

海のあなたの

秋かぜのおとづるる窓にして
わがこころ夢みたり。
海のあなたの遙けき國、
かのむらさき色に海の匂ふ國、
海のごとき情をたゝへし夫人の住む國。

心あこがれて今日もみる、
晴れたる空を渡る白き鳥、
汝の幸福を夢みつつ。

落日の記憶

高き三階のぼるこんに立ちて、
曾てわれ落日をのぞみしことあり。
遠く町の西方を流るる大河の蘆のしげみに太陽は沒
し行けり、

名殘の黄金色したる微光も
東の間にして消え失せぬ。

春の夜のはなやかなるともしびのもと、
君とありてふと思ひ出でたり、
曾てわれ高き三階のばるこんに立ちて
あはれなる落日を見しことあり。

花とわれと

机の上の小さい花、
お前の生命(いのち)とわたしの生命はいま相通ふてゐる、
お前のその花びらの一つ一つのほのかな慄へは
直ちに私の心のほのかな慄へと合する、
お前の小さい呼吸は

私の呼吸と同じだ、
そしてお前の瞳とわたしの瞳は
いまひとしき熱情に輝いてゐるのだ。

病める畫家

五月の鬱憂と
腐れゆく朱欒の匂ひ。
眼は池水のごとく澱み、
やるせなき肉慾の國を凝視すれば

水薬の瓶は蛇に似て
執念くもいたましき復讐を企つ。

畫は曇り
硝子戸に纏はる重苦しき外氣に
そことなく淺草の五月雨も見ゆ。

酸味を帶びたる吐息も物倦く、
あはれ身の衰へを嘆きつつ
鬱ぎ入る若き畫かき……。

夜の花

"Flesh" の憂愁……

憂愁の庭に蕾む
夜の花、

——しづかに頭を垂れた獸が通る。

"Flesh" の憂愁……
ひらかずして萎む
あはれなる夜の花。

秋

雨がみな白銀の尖つた針になつて
白い若い肉體を刺す。

秋ともなれば女もつれなく
夢は破れ、蟲は死ぬ、

友達も、友達の母も死んでゆく。

雨がみな白銀の針になつて、
心の悔を刺し通す。

金星堂刊行抒情詩集叢書

大正十五年三月十五日印刷
大正十五年三月二十日發行

北風と薔薇 ●定價六十錢●

著作者　百田宗治
發行者　東京市神田區今川小路一ノ四　福岡益雄
印刷者　東京市神田區三崎町三ノ九五　京華社分工場
發行所　東京市神田區今川小路一丁目　金星堂　振替東京三三二八番

耽視

價二圓
送料六錢

高橋元吉詩集

清澄なる品位と調子とを持つ當代珍らしい詩人であつて、忍苦の生活を謳ふ句には讀むものをして言々熱涙の溢れを感ぜしめずにはおかないであらう。

北風と薔薇

價六十錢
送料六錢

百田宗治詩集

百田氏が詩人生活十餘年間の多い作品の中から、抒情的なもののみ百五十篇程集めた。作者のよき心の紀念塔であり。絢情の溢るるものがある。

若き日の夢

價六十錢
送料五錢

松山敏詩集

新抒情詩人松山敏氏唯一の詩集である。先に滿都の子女から多大の好評を博したものに、尙數十篇を加へて改訂版とした。乞一讀をすゝめる。

550
44

終